

研究課題	近世天台寺院史料データベース構築の研究
研究代表者	中川 仁喜 (文学部 歴史学科 専任講師)

1. 研究目的

前年度に引き続き、調査が未開拓である近世天台寺院史料を歴史学研究者の視点で重点的に調査し、文化的関係を重ね合わせることで、近世仏教史・教学史を越えた寺院と僧侶の実態を解明する。日本近世仏教史は幕藩体制下における教団史・教理史研究が主体であるが、近世の僧侶は宗派や宗学を超えた兼修学によって智のネットワークを形成している。つまり重層的修学により業績や人間関係を築いているのであり、天台宗の史料であっても超宗派的視点で調査し情報を集積することが必要となる。この情報を基礎として、研究者が活用できるよう近世僧侶のデータベースの構築をも視野に入れる。

2. 研究方法

近世仏教史研究のために利用できる僧侶の人物データベースを構築することを目標として、天台宗・真言宗寺院の複数箇所を調査先として定め、所蔵されている近世歴史史料（古文書・古記録）・聖教・典籍を調査した。近世史資料は古代・中世に比べて調査自体が進んでおらず、対照的に点数は膨大である。基礎的分析に着手する前段階の作業として写真撮影などの調査収集を重点的におこなった。今年度は分担者である榎田良道（近世真言宗史）の協力により野中寺などの真言宗寺院も調査に加え、近世仏教における横断的な学僧の往来、寺内規制（清規・条制）も実見してその複合的な状況を再確認した。

また、既存の情報（編纂物）から学僧の人物情報を抽出してデータ入力し、横断検索の基礎材料を作製した。具体的には大学院生にエクセルによる入力であり、これも前年度から引き続き作業を進めた。

3. 研究成果と公表

第一に叡山文庫調査では、前回同様に史料の調査収集をおこなったが、特に比叡山が江戸幕府から指示される将軍家の各種御祈禱に関わる史料を重点的に調査した。近世の天台宗学僧は東叡山・比叡山・日光山の官僧も兼ねていることが多く、法会や祈禱に彼らがいかに関与しているかが今回の眼目であった。そのため、榎田良道氏の専門である真言宗御祈禱寺（護国寺・護持院）の研究実績と比較をして天台宗のシステムについて確認することが基礎作業となる。その結果、以下のことが明らかとなった。

江戸幕府から命じられる公儀御祈禱については、真言宗やその他宗派については寺社奉行より通達されることが定例化している。これは遠国の寺社についても同様であると思われる。それに対して天台宗、ことに本山でもある比叡山延暦寺においては、一貫して東叡山寛永寺執当（触頭）から命じられており、寺社奉行を介する形跡は見られない。公儀御祈禱は、東叡山寛永寺から滋賀院御留守居に通達され、そこから比叡山の実務者である三塔の執行代（東塔執行代・西塔執行代・横川別当代）に通達される。御祈禱結願後は、その報告と祈禱札を江戸の将軍家に納めるこ

とになる。これも真言宗の場合とは異なり、寺社奉行を介さずに京都所司代へ持参するという経緯であった。これは、天台宗の特質でもあろう。また、この御祈禱に関与した比叡山の僧侶が、御祈禱出仕を官僧としてのキャリアとして各名山に転住することも確認できた。

や滋賀院留守居が関与していることが明確になった。

第二に毘沙門堂門跡の調査においては、昨年同様、史料調査による情報の収集をおこなった。毘沙門堂門跡は、寺伝によれば大宝3年(703)にまで遡る古刹である。平安遷都時に京都市左京区出雲路の近くに移されて護法山安国院出雲寺と号し、最澄自刻の毘沙門天を安置したという。平親範が平等寺・尊重寺・護法寺の三寺を統合して一堂とし、建久6年(1195)出雲路に五間の精舎を建立、三寺の本尊を一所に安置した。その本尊から毘沙門堂と通称され、学匠明禪や檀那流の経海など、中世を通じて中古天台教学の根幹をなす人物を輩出してきた。特に檀那流経海の学統を毘沙門堂流と称し、その影響畿内のみならず関東田舎天台にも伝播した。しかし毘沙門堂は中世の度重なる兵乱で荒廃し、近世に入る頃には廃絶同様の状況となり、後陽成院から天海に預け置かれるに至った。実質的な毘沙門堂の再興は寛文5年(1665)、天海の遺命により弟子公海が山科に伽藍を建立するまで待たねばならない。山科の地を拝領し、御所の建造物を下賜されて毘沙門堂を門跡たるにふさわしい威容に整えた。公海が、後西天皇皇子の公弁をこの地で養育したことにより、毘沙門堂は輪王寺門跡の育成・隠居地を兼ねる機能も有することになる。毘沙門堂には、貴重な寺宝、史料を多数所蔵している。今年度は、昭和54年(1979)に叡山学院で調査作成した蔵書目録を基本として、近世学僧の活動や祈禱の状況がわかる史料を中心に調査した。ここで特に注目されたのが『山家四分記録大綱』である。これは常陸国月山舜慶から、比叡山西塔東谷楽音坊尊海に伝授された梶井流記家の口決である。同系統の聖教は、その大半が『神道体系』や『続天台宗全書』、古くは『群書類従』などに収められている。その取り扱いが山王神道書であり、『続天台宗全書』解題に「比叡山の記録や伝承を鎌倉期に比叡山の記家によって集成した書」とあることから明らかである。『山家四分記録』は『続天台宗全書』山王に所収されているが、本書の構成は全く異なる。内容は『全書』所収の『山家要略記』『山家最略記』『義源勘註』等と同様の内容であるが、貴重なのは「師云」として、法勝寺第3世の口伝が含まれること、そして舜慶自身の口伝が含まれていると見受けられる点である。本史料が特に重要なのは、山門の各種結界に関わる口伝であり、既存の地名に具体的な立地を解説した、元龜以前の比叡山の結界を具体的に知ることができる好史料だからである。そこで、この調査をもとに『山家四分記録大綱』を翻刻、紹介して研究に資することとした。(小此木輝之先生古稀記念論文集『歴史と文化』、青史出版、2016年5月刊行予定に所収)

第三に、大阪藤井寺市の真言宗野中寺の調査である。野中寺は真言律の一派である野中寺派の寺院であり、宗派を超えて四分律を堅持しながら修学・研究をおこなう近世三僧坊の一でもある。近世の僧侶は自らの意思による諸宗の教理・思想の修学も可能であり、宗派という組織を前提としながらその枠組みを超越した僧侶間の交流が顕著である。この近世における僧侶の重層的修学を理解する上で、野中寺の史料は非常に興味深い。野中寺の中興初代は真言律の慈忍恵猛であるが、その孫弟子にあたる湛堂慧淑は天台宗安楽律派の靈空光謙が自誓受戒する際の証明師を務め

ている。また、慈忍恵猛の弟子である戒山恵堅の弟子にあたる靈潭性徴は浄土律の一派をたてている。また、三僧坊の西明寺派の三代にあたる省我惟空からは京都深草の草山律の祖である元政が弟子として出ている。同じく三僧坊の大鳥神鳳寺派の二代快圓恵空の弟子に浄土律法然院派の忍徴が出て、近世南山律堅持の学僧の大半が三僧坊に関わることがわかる。野中寺をはじめとした三僧坊の史料群は稲城信子『日本における戒律伝播の研究』元興寺文化財研究所、2001（文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書）において目録化され、主要なものは翻刻されていることも本調査において確認することができた。また、大鳥神鳳寺の遺構でもある大鳥神社も巡見した。前掲の報告書により、大鳥神鳳寺で修学した真言律僧である玄海房智蓮が天台律院である東叡山浄名院と日光山興雲院に唐招提寺将来の仏舎利を奉納していることも、本調査で両者の史料をつきあわせることで判明した。ここにも、南山律の修学を媒介とした学僧の超宗派的な活動が読み取れた。

野中寺も近世公儀御祈祷寺の研究者である櫛田良道氏と調査をおこなったが、一般的な真言宗寺院が施主家・檀越に対する祈祷を宗教活動の中核に据えるのと対照的に、野中寺は清規において祈祷活動を極度に制限されており、非常に特徴的であることが明らかとなった。天台安楽律が、東照権現祭祀や輪王寺の公儀御祈祷体制に組み込まれて、祈祷を活動の重要部分に据えていたことを鑑みると、修学実績や業績が所属宗派にとどまらず、他宗派においても評価される教学のバイパスである南山律の持つ普遍性と、律院組織という各宗派内での存在意義を両面から捉え直さなければならないという課題に直面することとなった。

これらの調査で収集したデータは随時整理、目録化（もしくは悉皆を目的とした再調査）を進めているが、この情報がいかに共有化され、さらに個々の書誌情報が関連づけられるかが、本研究の最大の目的である。そこで、前年度に引き続き複写した史料や刊行された書籍などからデータを抽出し入力する作業もおこなった。これは大正大学の研究室内で作業を進め、相当数の人物データを入力することができた。ことに村田穎田氏による『関東天台学僧辞書』上中下3冊は、散在する諸史料原典から可能な限り人物データを集約した労作であり、本研究を構想する端緒ともなった。この辞典により、複数の史料にわたる人物データが効率よく抽出でき、データ化を進めることができた。これら調査や学内でのデータ入力作業には大正大学史学専攻の大学院生によるところが大きい。

このデータベース化作業における問題点も判明した。まず、同一人物の情報が出典史料によって異なる場合があることが確認され、これが個人のメタデータを完成させる上で障害となることがわかった。これについては、最終的により信頼がおける史料を選択することによって解決するが、膨大な人物データを一人ずつチェックする必要がある。また、煩瑣になりがちな項目をいかに集約するかも課題として浮かび上がった。現状3系統で入力作業を進めているデータベースをいかに有機的に集約させるかが鍵となる。本研究は試験的であり途上段階であるが、近世学僧の人物データベース化の手段として有効であり、他分野の研究者からも反響を得た。また、叡山学院の研究員である藤田和敏氏も近世天台宗僧侶のデータ化の重要性を指摘されており、第21回平安仏教学会学術大会において「叡山文庫蔵「延暦寺三院僧徒臈次帳」の基礎的考察」と題して

発表されており、その問題提起と研究手法は図らずも当研究とほぼ同様であった。藤田氏は比叡山延暦寺の僧侶・寺院を主体としており、本研究は広範囲を意識しながらも入力が入力最前線で行っているのが関東檀林系統の僧侶であることから、連携して横断的な研究が可能と考えられ、更なる人物データの充実化も図れると思われる。藤田氏の同意が得られれば、項目を統一して横断検索が可能のようにデータをブラッシュアップすることも考慮しており、連携が可能であるかアプローチをする予定である。

この様に、当該データベースの構築は、時間をかけて継続的かつ重層的におこなわれる必要がある。調査も天台宗のみにとどまらず、大正大学の特色でもある超宗派で実施し、人物・寺院・蔵書構成などについて多角的な見解を得るべきであると痛感している。長期計画で考えた場合は、研究参加者も歴史学・天台・真言・浄土・国文学などの諸分野にわたり、それぞれの見地から史料・聖教を分析する必要がある。最終目的はデータベース化であるが、調査対象が未開拓分野であるため、寺院への近世史資料の調査によるデータの収集がその大半を占めることとなる。そのため、調査対象の範囲を広げ、さらにはそれが可能な人員の確保も今後の課題として挙げられる。

本研究の成果は前掲論文のほか、天台宗教学大会における発表、「天海と法勝寺 滋賀院の前身としての法勝寺」(『季刊日本思想史』、ペリカン社、入稿済、近日発刊予定)などで随時発表する予定である。特に関東天台僧データベースは、まず目録化して公開することを企図して作業を進めている。そして、今後さらなるデータベースの充実化をはかるべく、本研究をさらに推し進めて科学研究費を申請する予定である。

【図】近世天台宗僧侶データベース(仮)一部

相契	②百壽		85	元永元年7月15日		円師		極楽寺
慶蓮	③自性院	寛永11年(1634)		元禄7年(1694)2月10日		①光慶権僧正 ②千手院秀仙		
重蓮	②寂照、玄慶、四碑			宝暦3年(1753)8月7日	備州	①法光寺慶運 ②妙法院敬同	法慶院	正観院
可透	②相閣			享保19年(1734)11月29日		無説	無説寺	
伏捨				正保元年(1734)8月18日	播州		仙波喜多院	
賢栄	③宝蔵屋			康長13年(1608)12月23日				
正直	②重光		57	宝暦10年(1760)6月14日	相州	権大僧正玄照		
豪宗	⑤大西氏				和州派上郡	真法院観洞		
慈観	⑤木塚氏				下野国安藤郡佐佐木村			
慈等								
生順	⑤漆氏				作州			
宋順	②鐘月 ③慈海 ④宗順 ⑤源氏				武州茂原郡			
亮順	②円山 ④亮順 ⑤井田氏				武州多摩郡			
惠宅	④亮雄	元文5年(1740)月日不詳			尾州	妙嚴和尚	華頂山元慶寺	
僧敏	②密成 ⑤小西氏				讃州三野郡寺家村	孝順		
豪湖	②寛高 ④無所得道人 八万四千煩惱主人	寛延2年6月18日	87	天保8年(1835)7月3日	肥後国玉名郡山下村	貴道		
実成	④亮安徳 ⑤有澤氏	寛政12年(1800)1月1日	83	明治15年(1882) 15日	越中国砺波郡佐野村			
宣考	③随順 ⑤七井氏	元禄8年(1695)	72	明和4年(1767)4月6日	江戸			
宣幸	①徳謙	寛政元年(1789)	44	天保3年(1832)8月8日	野州			
宣興	①奥村 ⑤菊地氏	享保8年(1723)	55	安永8年(1777)9月7日	下野州都賀郡	宣応		
宣家				正徳2年(1712)				
宣純	⑤杉田氏	寛永17年(1640)	59	元禄11年(1698)5月9日	武州豊島郡		東漸院	
宣順				天和2年(1682)5月9日			東漸院	
宣成	⑤河原氏	天明5年(1785)	33	文化15年(1818)4月3日	下総州香取郡高岡村	僧正長敏	元光院長善	明王院 真如院
宣清	⑤野澤氏			享保10年(1725)6月14日	野州日光	宣存	東漸院	戸山山助修院
宣存	③宮松丸 ⑤公祐、賢空、見空、守快	寛永16年(1639)	70	宝永5年(1708)5月17日	上野州群馬県	権僧正宣祐	円珠院	台山教王院
宣典	①全性 ⑤中氏、義海	宝暦4年(1754)	68	文政4年(1821)5月5日	淡海	義本	教王院	常照院 福聚院
宣伝	⑤小牧氏	寛文8年(1668)	35	元禄16年(1703)4月3日		宣純	東漸院	安祥院
宣如		文化元年(1804)	47	文政13年(1830)12月11日	江戸	宣典	東漸院	常照院
宣祐		康長元年(1596)	66	寛文元年(1661)				
宣雄		元禄14年(1701)	50	寛延3年(1750)5月25日	信濃国佐久郡三塚庄			
宣徳		享保3年(1718)	34	宝暦元年(1751)5月12日	備州	津梁院宣応		修禪院
宣融	⑤佐久間氏			寛保3年(1743)				
宣重	⑤慈澤	延宝3年(1675)	50	享保10年(1725)				

	大僧正	「相実大僧正伝」	百善撰政太政大臣実頼の後胤。中将参議従三位顯実の三男。群明律師の孫。台密法曼流の開祖。		80-86
	大僧正	「前大僧正慶喜伝」	前大僧正慶喜は華山院左大臣是廣公の孫。		86-88
	大僧正	「大僧正重華伝」			88-90
		「一乘菩提可透伝」			90-91
		「伏僧法印伝」			91
		「賢宗法印伝」	氏族は不明。永禄年間初めに行門に入る。		91-92
	大僧正	「正偏伝」			92-93
		「家実伝」			93-94
		「大僧正慈観伝」			95-102
	大僧正	「慈等大僧正」			102-104
		「生順伝」			105-110
		「宗順伝」	父は名不明。母は清水氏。		111-113
		「亮順伝」			114-118
		「恵宅大和尚伝」	華頂山元慶寺中興第2世。安永9年妙嚴和尚亮範と号する。天明元年10月21日、妙嚴和尚入寂す。年80歳。これによって恵宅が繼ぐ。		118-127
		「釋僧敏伝」	天明5年、年9歳にして備中福壽院へ入る。		128-130
		「釋豪潮伝」	肥後国玉名郡山下村真宗安養寺内専光寺において誕生する。		131-133
		「釋実成伝」	天保6年(1835)閏7月3日没する。中秋村に埋葬される。長栄寺中興第一世。明治19年12月22日、大僧正の位を授かる。		134-
	大僧都	「東観山子院法派記」東観山子院歴代僧記巻下「第四世大僧都宣考」		『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1099-1100
	権大僧都	「東観山子院法派記」		『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1100-1101
	大僧都	「東観山子院法派記」東観山子院歴代僧記巻下		『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1101-1103
		「東塔世譜」		『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1103
	大僧正	「東塔世譜」東観山子院法派記「東観山子院歴代僧記巻上」	七歳で出家する。「東観山子院法派記」によると59歳で没したとあるが、「東塔世譜」には56歳で没したとの記述がある。	『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1104-1105
	権少僧都	「西塔世譜」	名は詳細不明。	『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1105-1106
	権大僧都	「東観山子院法派記」	第6世権大僧都。	『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1106-1107
	大僧都	「東観山子院歴代僧記巻下」	第6世大僧都。享保12年6月14日、戸隠山の勤修院において没する。	『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1106-1107
	権僧正	「執当譜」東塔世譜「東観山子院歴代僧記巻上」	第3世権僧正。貞享3年11月、名を宣存と改める。	『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1108-1116
	大僧都	「東観山子院法派記」	第6世前大僧正宣典。	『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1116-1117
	権大僧都	「東塔世譜」東観山子院歴代僧記巻上」	第8世権大僧都。	『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1117
	権大僧都	「東観山子院法派記」	第7世権大僧都宣如。	『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1117-1118
	権僧正	「東観山子院法派記」東観山子院歴代僧記巻上」	松林院権僧正宣祐法派。第1世権僧正宣祐。	『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1118-1124
		「日光山世代記」		『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1124-1125
	権大僧都	「東観山子院法派記」東観山子院歴代僧記巻下」		『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1126
		「東塔世譜」東観山子院歴代僧記巻下」	第4世大僧都。	『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1127
				『關東天台学僧録(下)』	村田頼田氏 1128